KAORI NAKANO／[illegible]

写真はファッションアヴァンガルドからテーラードに転じた[illegible]

スーツ、360年目の自由

なぜいま、スーツなのか？
コロナ禍を経て、紳士服を取り巻く環境が変化するなか、
服飾史家の中野香織は「スーツは、まだ終わっていない」と考える。

WORDS BY KAORI NAKANO

起源は1666年10月、イングランド王チャールズ2世が発した衣服改革宣言にさかのぼる。「今後はこの服を採用する」との宣言のもと、上衣、ベスト、下衣、シャツ、そしてタイという5つの要素を基本とする服装システムが制度化された。これは単なるドレスコードの設定にとどまらず、「今後、変えることはない」という倫理的呪いを伴った美的フォーマットとして、スーツの起源に位置づけられた。宣言の目的は、貴族の倹約。見えない袖をなくし、背中は安価な生地でよいというベストを導入したことが画期的だった。以後、宮廷で誇示的に消費されていた贅沢は否定され、貴族は倹約をまとうことを美徳とし始めた。こうしてスーツは「贅沢を拒否することで権威を生む」という逆説的な力を備えたのである。

この反・贅沢のスタイルは、のちの啓蒙思想や市民革命と手を携えながら、個人の理性と節度、そして自由の象徴となっていった。特権のための装いから、自由な精神を持つ男のための装いへ。装飾を削ぎ落とし、カットとフィットで魅せるという精神は、1810年代にジョージ・ブライアン・〈ボー〉・ブランメルによって極まり、ダンディズムの形式美となって今に受け継がれる。

ダンディズムの精神は昼夜それぞれの正礼装・準礼装といったドレスコードを遵守する教養も要求していくが、それだけでは人は疲れる。1860年代には、厳格なドレスコードの世界からいっとき逃れ、ラウンジでくつろぐための「ラウンジスーツ」が登場する。ウエストに切り替えのない簡素なこの服は、産業革命とともに普及したミシンにより量産され、階級を超えて広まった。皮肉なことに、このくつろぎのスーツこそが、ビジネスと社交、規律と礼節を象徴する現代的ユニフォームの祖として地位を確立するに至っている。

スーツの歴史の面白いところは、保守的な制服に見えるスーツが、決して保守一辺倒の服ではなかったということにある。たとえば18世紀後半のイギリスに登場した「マカロニ」と呼ばれたイタリア帰りの若者たちは、極端に細いシルエットや派手なかつらといった目立つ装いで、伝統的スーツの秩序を陽気に逸脱してみせた。あるいは1940年代のアメリカにおけるズートスーツは、黒人やラテン系の若者たちが体制に対する抗議としてまとった過剰な服だった。スーツは体制の象徴であると同時に、それに対する異議申し立ての手段にもなりうるのだ。逸脱を許容し、規律を装いながら反抗の精神を表現する。この可塑性こそがスーツの真の力である。

スーツの可塑性は、地理と文化の多様性をも包摂していく。イギリスの威厳と禁欲、イタリアの色気と柔軟さ、フランスのクチュール的な美学と精緻、アメリカの合理主義、そして日本の誠実と謙虚。それぞれの国が、スーツに自らの国民性や文化を投影してきたのだ。アフリカ・コンゴでは、サプールと呼ばれる紳士たちが鮮やかなスーツを誇りと平和の象徴としてまとう。中東では伝統的な頭部の被り物とともにスーツが着用され、文化の共存を体現する。そしていま、クラシコ・アジアと呼ばれる流れが台頭し、韓国、中国、そして日本の都市部からも独自のスーツ美学が芽吹きはじめている。

21世紀、ファッションは性差や既成概念の解体へと向かい、スーツもその波の中で再定義されつつある。スカートやシースルー素材、パールやメイクアップといった要素とともに装われる男性のスーツが現れることももはや珍しくない。女性も普通にスーツを着用する。カマラ・ハリスは米副大統領時代、ほぼ一貫してダークスーツで職務を遂行した。メラニア・トランプ2.0は公務でスーツを着用することが増えた。ジェンダーを超えて自由にまとえる形式として、スーツの普遍性が証明されつつある現象と見ることができる。

こうしたグローバルな変化のなかで、いま最も興味深い場所のひとつが日本であろう。世界で最もスーツ着用率が高い国でありながら、いやそれゆえに、そのスーツは一様ではない。伝統的なテーラリングを極めた職人の緻密な手仕事と、脱構築を大胆に取り入れた新世代のデザイン、海外のテーラリングの要素がバリエーション豊かに共存している。就職活動から冠婚葬祭まで、人生の儀式に深く関わってきた服でありながら、コム デ ギャルソンのようなブランドにより、スーツはより柔軟に、個性的な表現へと変化を遂げつつある。

堅実さと冒険、規律と自由。そのあわいに生まれる無数のスーツ像の最前線が、幸運なことに、いまの日本で観察することができる。伝統を重んじながら変化を恐れず、自らの様式を研ぎ澄ませていく。そんな日本の美意識は、スーツという形式と相性がよいのだ。

スーツは、まだ終わっていない。むしろ、360年かけてようやく本当の自由にたどりつこうとしている。